

よみがえった「ふゆみずたんぼ」

子供たちも生き物も元気です！

まるで3月11日で時間が止まったような、津波のあとの荒涼たる風景。その中で、小さな田んぼの一角だけがふっと息を吹き返した。宮城県気仙沼市大谷地区の、市立大谷幼稚園、大谷小学校、大谷中学校が連携して作る「ふゆみずたんぼ」。津波をかぶったにもかかわらず、今年も6月7日に田植えの日を迎えた。



3月11日

あの日。津波は幅広の谷戸の田をすべて飲み込んで、その奥にある、海から600~800mほど離れた小中学校の校舎1階にまで達した。道路が寸断され、家族と連絡がとれない児童生徒は中学校の体育館で一晩を過ごしたが、寒さに震える小学生を、中学生が毛布代わりに紅白幕で包み励ましたと聞いた。

津波で児童生徒の3分の1が家を流され、避難生活に。電気水道は復旧せず日常生活を取り戻すにはほど遠いが、4月21日ようやく始業式が行われ、学校生活が再開した。

田んぼ復興

それからひと半月後の田植えの日。朝から見事な晴天に恵まれた。

「今年も田植えができて、本当によかった。生徒たちは楽しみにしていましたから。学校生活もようやく平常に戻りつつあります」。しみじみ語る中学校の上杉良範校長。

小学校の藤村俊美校長も、「田んぼの風景や、子どもが田植えや稲刈りをする姿は、地域のひとたちを元気づけるでしょうね」と目を細める。小中学校とも校庭には仮設住宅が建ったため、田んぼや畔道、湧水のある水路は、子どもの貴重な遊び場になるはずだという。

ふゆみずたんぼ



「ふゆみずたんぼ」は、冬の間も水を張るため、生き物のいのちがつながる楽しい田んぼ。イトミミズ、ミジンコ、微生物もいっぱい、それは香りのいい美味しいお米がとれるという。

5年前に中学3年生が総合学習で始めたら、あまりに楽しそうなので幼稚園が田植えや稲刈りに参加。小学校も5年生の総合学習を中心に加わった。大谷の子どもは、田んぼを遊び場しながら、中学卒業までの10年間で「米づくりのベテラン」にそだつのだ。

大谷ハチドリ計画

大谷っ子の地域学習は田んぼから始まり、海、川、そして海岸の松林へとつながっていった。大谷の海辺は磯と砂浜が交互に連なり、アワビ、ウニ、海藻の漁や、ワカメなどの養殖漁業がさかん。砂浜には、今の日本ではとても希少になってしまった天然ハマグリが生息していて、「獲りすぎない」工夫の伝統漁法が残っている。

しかしここ数10年でアワビ、ハマグリはガクンと減り、海藻の林が消える「磯焼け」現象が進んでいる。また、白砂青松の海岸を彩るクロマツの「松枯れ」も深刻なのだそう。こうした背景から、「自然から食べものをいただくことで、暮らしが立つようにするにはどうしたらいいか」という視点で、ふるさとの自然の仕組みと農林漁業の知恵を学ぶのが、大谷の地域学習だ。

小学校3、4年生は本格的にワカメを養殖、茎は肥料として田んぼに入れている。小6から中1にかけては海岸の松枯れ対策がテーマ。中学2

年生では、海の環境問題「磯焼け」に取り組んでいる。幼・小・中連携のこの実践は「ハチドリ計画」と名づけられ、これまでに多くの賞を受賞している。

子どもたちの声に押されて

そこへ今回の自然災害。海の学習はもちろん、「田んぼも今年はどうてい無理だ…」と、誰もがあきらめていた。ところが、「また田んぼをやりたいな」という子どもたちの小さな、しかしたくさんの方が、おとなの心を揺り動かした。

中心になって動いたのは、地域講師として7年前から田んぼの総合学習を任されている小野寺雅之さん。17年前に大谷にUターンした後、農漁業を営みながら自給自足の暮らしを目指している。

「津波の年は豊作。これは昔からのいい伝えです」と小野寺さん。「稲は育つ」という確信めいた期待はあった。しかし津波が運んだ大量の漂着物をどうするのか。学校も地域の人たちも、それぞれの仕事や生活で手いっぱい。そこで、思い切ってインターネットでボランティアを呼びかけてみると、何と100人を超える人たちが全国から集まったのだ。宿泊は、水道も電気も復旧していないものの、中学校が校舎を開放してくれた。

よみがえる田んぼ



5月の連休中、毎日20~30人のボランティアが田んぼに結集。大きなものでは家や車から、小さなものはガラスの破片にいたるまで、文字通りふるいにかけて糞ざらえする作業に取りかかった。

その様子を見て、「こんにちはー。わたしにもちょっとやらせて」と、部活帰りの中学生が次々おりにくる。通りがかりの小学生も「土を掘るとカエルが出てくるってほんと?」と、スコップ片手にしゃがみ込む。みんな、自分たちの田んぼが気になって仕方ないのだ。それに、「外で遊ぶのは久しぶりなんだ」。



こうして見事によみがえり、田植えまでの1か月間、満々と水をたたえた田んぼ。漂着物とともに心配された塩分濃度は、調査の結果、従来の数値に戻っていることがわかった。田んぼの生き物たちも、「どこに隠れて生きのびたのだろう」と不思議なほど、種類も数も増えていった。

子どもの笑い声が響く

いよいよ田植えの日。ガラス片や金属が残っているかもしれないので、いつもなら裸足に素手のところを、今年は長靴と手袋の重装備。さらに小学4年生までは、残念ながら畔での応援に回ったが、大谷地区のすべての幼稚園生と小中学生が田植えに参加。新年度が始まってから最大のイベントになった。



ぬかる深い泥に長靴をとられ、あちこちで悲鳴と笑い声が響く。「もうめんどくさい」と、途中から長靴も手袋も脱ぎ捨て、例年とおりの裸足で「ぬるぬる」の泥を楽しむ子が続出。最後は泥団子投げにエスカレートする子たちも。泥だらけになった手足や長靴を洗うのは、泉がこんこんと湧き出ている田んぼ脇の水路だ。

この子たちも田んぼの生き物

ひとしきり騒いだあとの子どもたちに、田んぼ復活の感想を聞いてみる。

「泥にはまって疲れた〜」と、どの子もあっけらかんとしたものだ。明るくさばさばした様子に、ふと気づかされた。「そうか、この子たちも田んぼの“生き物”のひとつなんだ。“生き物”として自然の中にあるかぎり、自然災害も森羅万象のひとつ。あるがまだ。

田んぼや海の学びで、自然から食べものを得て生きる本能を失っていないから、この子たちはこんなに明るく強いのかな――。短絡的すぎるかもしれないが、ついそう思ってしまうほど、生命力に満ちあふれた子どもたちの笑顔だった。

♪田んぼはこうしてよみがえった

①田んぼの水抜き（4月28日～29日）



②車など大きな漂着物の撤去、水路をふさぐ家屋の一部解体（4月30日～5月5日）



③津波が運びこんだ土砂や石を除去（5月2日～5月4日）



④土を掘り起こしながら、ガラス破片や細かい漂着物を除去（5月3日～5月5日）



⑤新たに借り受けた田んぼの修復。水路と畦を修復（5月6日～5月8日）



⑥灌水（5月8日～）



⑦田の高低差をならす。畔の仕上げ（5月25日～26日）



⑧ひとの足で泥をかきならす「人間しろかき」（5月中。小中学校の職員と中学生による）



⑨人力では不十分だったため、機械でしろかき（6月4日）

⑩田植え（6月7日）

大浦 佳代（海と漁の体験研究所代表）

※農文協「食農教育」2011年夏号（新装刊「のらのら」準備号）への掲載記事に加筆